

# 金平茂紀×兼島拓也 特別対談



『ライカムで待っとく』作者

兼島拓也

ジャーナリスト

金平茂紀



▲対談の映像はこちらからご覧ください

この作品に通底するのは、「沖繩は日本のバックヤードではないのか」「沖繩の犠牲の上に成り立っている日本という国」という想いです。本作品に登場する「沖繩」をより深くお伝えするために、国内外の社会情勢を見つめてきたジャーナリストの金平茂紀さん、本作品の作者・兼島拓也さんの対談をお届けいたします。

兼島 調べることももちろん大変でしたが、そもそも、僕の考えが沖繩を代表しているわけではないですし、いまだに迷うことが多いです。たとえば、沖繩で起きた米兵絡みの事件をエピソードとして書いた時は、事件の被害者のかたを利用してしまっているのではないかと悩みました。戦争についても、小さい頃から学校や家族から悲惨な話をずっと聞いてきているので、取材でそれを掘り起こすことへの恐怖のようなものがあります。僕らの世代は、経験していないからこそ語れるところもあるんですが、経験している人たちは、忘れていた方が、生活が円滑にいく面があるわけです。なので演劇をやるからという理由で、蓋をしていたつらい過去を思い出させることには、どうしても尻込みしてしまう感覚があるんですね。言い方は悪いですけど、沖繩の歴史を「ネタにする」ようなことをしているのか、自分にこんなことを言う権利はあるのかということ、現在も悩み続けている感じです。

金平 僕らも「こんな報道をして、この人のほんとうの想いや重みが伝わるのか」ということを、いつも自問自答しながらやってきました。ところがあります。そうするとね、だいたい逃げるんですよ。重いところから逃げて、耳ざわりのいいことや美談しか描かなくなってしまう。でもそれは、歴史に対してとてもよくないことだと思うんです。表現する点では、演劇と報道は似ていますよね。表現というのは、うまくいったりいかなかったりするもので、失敗してもいいんです。表現しようという、意思の方が大事だと思います。扱うのは、あまり

にも重い歴史なんですから。ライカムは、現在はイオンモールで、おじいちゃんやおばあちゃんの涼み場所になってしまっただけ、昔は米軍司令部と専用のゴルフ場があった。周辺では米兵絡みの事件がたくさん起きていたところ。軍事占領によって植民地になった沖繩の人たちは、酷い差別をされてきたわけで、その歴史は語り継いでいかなければいけませんよ。

兼島 『ライカムで待っとく』では、伊佐千尋さん著のノンフィクション『逆転—アメリカ支配—沖繩の陪審裁判—』から着想を得てストーリーラインをつくっていたので、裁判シーンも詳しく書こうとしたんですが、いくら裁判を正確に再現しても、それだけでは表現としては抜け穴がたくさんあって、この人たちが言葉にしている部分を書かなければ、ただの事実の羅列になってしまうことに気づいたんです。だったら、いっそ今、僕が生きている時代の視点から書く方が真摯に向き合えると思って、自分には見えていないこと、知らないこと自体も提示することにしました。金平さんがおっしゃるように、歴史的にいろいろな事件や出来事があった場所ですが、今は「ライカム」といえば、「あ、イオンモールね」と地元では言われます。その現実さえも書きたいという想いがありました。

金平 それはとても大事なことだと思います。「バックヤード」という言葉が出てくるのも印象的でした。「Not In My Backyard」(略してNIMBY)。ゴミ焼却場や原発のようないらないものを「うちの裏庭」にだけ持ってくるな」と言う住民の態度のこと、僕もアメリカ駐在時によく耳にしたものですが、「沖繩」島全体がバックヤードなんですよ。日本の」というせりふが出てくる。すごいなと思いました。兼島さん世代から、こういう言葉が出てくるところが、神奈川県民と基地の話も、その比較で出てきますね。

兼島 NIMBYという言葉は、この脚本を書き始めてから知りました。きれいに整った店頭に対して、店舗裏の在庫品やら何やらでごちゃごちゃしている場所の意味もある「バックヤード」という言葉によって、(沖繩の立場と)ライカムのショッピングモールが繋がった!と思って、せりふに使いました。実は作品タイトルにNIMBYを入れる案も当初はあったくらいで、「バックヤード」というのは、この作品のキーワードなんです。

金平 そこに住んでいる人と、そうでない人との決定的な

違いです。どうせ(住んでいない)あんたらは押しつけても平気なんですよ」と、そこに住んでいる人なら言える。沖繩にシンパシーを持って基地反対を訴えていても、じゃあ代わりに自分が住んでいるところに基地を引き取る気があるかといったら、多くの人は、基地は沖繩と決まっている。「バックヤード」は、このどうしようもなさを示す言葉ですね。

兼島 僕らのような若い世代にとって、基地は生まれた時からあるものなので、上の世代が反対運動をするのを見て「どうせ変わらないんだから、この中でうまくやっていくしかないじゃん」という感覚を持っているところがあるんです。よく言えば未来志向というか、現実の中で自分にとっての幸せを見つければいいという感覚。「決まりだから」というせりふも出てきますが、この短い言葉によって、抗えないような強さや、諦めや、いろんなものが混じった感じが表せるかなと思っています。

金平 なるほど、強烈ですね。

兼島 書きながら、自分でも暗くなっていくんですけど(笑)。ただ、諦観だけではないんです。作中の伊礼ちえの祖父は『逆転—』著者の伊佐さんがモデルなのですが、彼はなぜこの手記を誰にも見せずにいたのか、演出の田中麻衣子さんとともにずっと考えていました。そしてあるとき、ずっと続いていくこの沖繩のループ構造の中に隠すように仕込ませておくことで、いつか誰かがこれに気づいて風穴を開け、ループがらせんになる可能性に賭けたのかもしれない、という話になったんです。過去の世代の人が、未来の世代に託すと言ったら大げさかもしれませんが、僕が今、苦しみながら書いている戯曲に次の世代の人が接する頃には、どうか状況も変わってくれるんじゃないか。そんなうっすらとした期待の感覚をちょっとだけ覚えるところがあった、それが実現したいなと思っているんですけども。

金平 「彼らは人生を賭けて事件を起こした。虐げられてきた人生を逆転させようとした」というせりふも出てきますが、伊佐さんが書いた動機は、きつそうなんです。兼島さんは、これを今まさに自分たちの世代に引き受けて、現実を見据えながら提示しようとしている。年長世代と若い世代、神奈川と沖繩でどう受け止められるのか、きつとそれぞれ違うでしょう。多義性や多様性のもとに、いろんな人を巻き込んでいくのが演劇が持つ本来の力だと思おうので、上演をとても楽しみにしています。

(取材・文:伊達なつめ)

# ライカムで待っとく

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

発行: KAAT神奈川芸術劇場  
WEB|PC/Mobile|kaat.jp

## 公演期間

2022年 令和4年  
11月27日(日)  
▼  
12月 4日(日)



長塚圭史がお届けするウェブラジオ

# RADIO KAAT

YouTube にて公開中!

## 神奈川県民割引、はじめます!

かながわ 県民割

対象 神奈川県在住 在勤の方

対象公演  
KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 『ライカムで待っとく』  
11/27(日)~12/4(日) <中スタジオ>  
KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 『蜘蛛巣城』  
2023/2/25(土)~3/12(日) <ホール>

季刊誌 神奈川芸術劇場

# KAAT PAPER

モノ・人・まちをつくる 創造型劇場 KAATの広報紙

KAAT神奈川芸術劇場が年4回発行する広報誌

配布箇所: KAAT神奈川芸術劇場  
神奈川県民ホール、神奈川県立音楽堂  
みなとみらい線日本大通り駅 ほか